

○+△+□=◎



港まちづくり協議会 2021年度報告書

JOINT COMMITTEE OF PORT TOWN
ANNUAL REPORT 2021

Introduction

この街の中央を走る道路・江川線を舞台に開催されているマーケットイベントが「みなと土曜日」。かつて多くの人々が行き交ったという港まちのメインストリートで「寛容性」をコンセプトに“にぎやかで多様な人々が集えるマーケット”を育むことが私たちの目標です。

このプロジェクトの背景には、街の中心にあった公設市場の閉店という地域商業の危機がありました。しかし、それを打開する直接的な契機は、名古屋市が取り組む街路樹再生事業への参画という別種の取り組みから生まれました。この報告書では、その背景と契機、さらには対話を重ねて地域の課題に向き合ったプロセス、そして、その先に見えてきたビジョンについてまでをダイジェストで振り返ります。「新たな人々を受け入れていくための土台づくり」について一緒に考えていきましょう。

Contents

- 01 メインストリートで育む、港まちの新たなビジョン
- 03 築地公設市場問題と街路樹再生ワークショップ、そして生まれたみなと土曜日
- 05 街の人に話を聞きました
- 07 みなと土曜市の1日
- 08 みなと土曜日メンバー座談会
- 09 数字で振り返る2021年度データ



港まちづくり協議会 2021年度WEB報告書
WEB | www.minnatomachi.jp/report/2021.html
※港まちづくり協議会では、冊子版とWEB版の年次報告書をご用意しています。



メインストリートで育む、港まちの新たなビジョン

海からの潮風が吹き抜ける江川線は港まちのメインストリート。その両側には緑あふれる街路樹やデザインを凝らした花壇が目を引きまします。

国道である江川線には高度経済成長期の都市構想が反映された巨大な街路樹が立ち並んでいます。しかし、それらの中には50年が過ぎた巨大な樹木もあり、安全性や維持管理コストなど様々な問題を抱えています。それはこの街だけでなく全市的な課題となっており、近年には将来に向けたビジョン改訂や再生事業がスタートしています。それらに対し、いち早く取り組んだ港まちでは、行政と住民が協働して、街の人々の声を集めたビジョンを描きました。そして、その取り組みのプロセスの中から、地域商業の衰退に対してもアプローチをかける新しいアイデアが生まれ育っていきました。

VOICE

伊東新治さん

名古屋市緑政土木局
港土木事務所 副所長

港まちの江川線は立派な景観を誇っています。されど、大きくなり過ぎた街路樹は安全性や機能性を低下させます。取り組みの成功と一緒に目指しましょう！

溝口由美恵さん

港まち在住
地域でこども食堂を開催している

根っこにつまずいて危ないって話をよく聞いたんです。でもね、夏に散歩するお年寄りには、貴重な木陰でもあるんですよね。四季の移り変わりも綺麗なのよね。

早川勝利さん

港まち在住
港まちづくり協議会会長

落ち葉をなんとかして欲しいって声なんか聞くけど、自分の街だろうって(笑)せっかくの立派な江川線なんだから。みんなで楽しいことやろうって思うんだわ。

古橋敬一さん

元 港まちづくり協議会事務局
次長

メインストリートは街の顔であり舞台。港まで続くマーケットや音楽イベントがやれたら、名古屋唯一の特別な場所が生まれるに違いない！

彦坂靖子さん 篠塚泰伸さん

名古屋市緑政土木局
緑地部 緑地維持課

次世代につなぐ持続可能な街路樹づくりを目指した「名古屋市街路樹再生なごやプラン」により、地域の皆さんと一緒に街路樹の再生を進めていきたいです。

なぜ？どうして？

築地公設市場問題と街路樹再生ワークショップ、そして生まれた みなと土曜日

地域の中にあるそれぞれの問題に悩むのは、同じ地域の隣人同士だったり…。

それぞれの問題を切り離さずに、一つのテーブルを用意して、みんなで一緒に考えてみると意外な解決策が見えてくる？

イラスト | 宇佐江みつこ

消えてしまった交流の場…築地公設市場の閉店

街の中心にあった公設市場（※1）がある日突然閉店。突如発生した買い物難民の問題に多くの人々が困り果ててしまいました。しかし、地域商業の衰退は全国共通の難題、港まちもまた例外ではなかったとも言えます。むしろ、より切実な問題となったのは、日常的な交流の場が地域から消えてしまったことでした。

Q 買い物に困った人はどうしたの？

A 近隣のコンビニや八百屋などの協力で、必要最低限の日用品や生鮮食品を徒歩圏内で購入できる環境が整うことで助けられているそうです。「週1で息子に車で買い物に付き合ってもらおう」というお年寄りも。

Q 地域における市場の役割って？

A 「市場」は暮らしの中の出会いの場であり、社交の場でもありました。顔見知りとするおしゃべり、ただすれ違うだけでも、地域の中でお互いの情報を交換する大切な交流の役割を果たしていたのです。



新しい交流の場を、みなと土曜日

毎月第2土曜日は「みなと土曜日」。公設市場の閉店後、街路樹再生ワークショップと時期を同じくして始まったマーケットイベントです。当初の構想は、中心市街地商店街が開催場所でしたが、ワークショップを受けて、そのメイン会場をこれから生まれ変わっていく江川線歩道の公共空間とすることが決まりました。

Q 開催までの準備は？

A 公設市場の再活用を視野に入れたイベントや、小規模な室内マーケットの実施から初め、地域の方への周知のためのチラシ制作や、アンケートを取るなどの下準備を重ねました。

Q 開催場所の選び方は？

A 本格始動前は実験的に公設市場や港まちポットラックビル（※2）など室内で開催し、2022年からは街路樹を伐採して広くなった歩道空間と、公設市場前の道路2箇所を活用し始めました。



※1:生活必需品を小売りし、市民の消費生活の安定向上を図ることを目的に名古屋市が設置している市場。築地公設市場を含め5か所を残すのみ。
※2:港まちづくり協議会が拠点として使用している港まちポットラックビルは商店街の中ほどに位置する。



悩みを共有、街路樹再生ワークショップ

官民協働のワークショップを全5回開催。老若男女が参加し、世代や立場を超えた意見が飛び交いました。まち歩きによる調査で「落ち葉の清掃」や「舗装道路の根上り」などの問題を共有し、樹木の伐採や更新の意義を議論し、街路樹再生事業への合意形成を図りました。描いたビジョンは地域の総意として、名古屋市に提出しました。

Q どんなビジョンが生まれたの？

A 街路樹伐採の有無だけでなく、広がる公共空間を地域でどんな場所として活用していくかを議論しました。その過程で、街のかつてのにぎわいを再生する場を目指すマーケットイベント事業の構想が誕生しました。

Q 街路樹のその後は？

A 歩道の内側に植えられているケヤキの伐採が進んでいます。江川線の東側は港まで見通せるようになり、歩道の道幅が広くなりました。2023年度には江川線のケヤキがすべて伐採される予定です。

|他にもこんなことがありました|

子ども向け工作イベント

視点を落として街を歩いてみると枯れ葉や枯れ枝、さらには樹皮など街路樹の「落としもの」がたくさん見つかります。それらを活用したスタッフによる子ども向けワークショップはみなと土曜市のファミリーエリアで大人気です。



取材を受けました

“移住/ローカル/拠点づくり”をキーワードに事例を紹介するWEBサイト「real.local」で古橋（元事務局次長）が街路樹再生ワークショップやみなと土曜日について、そしてこの街の成り立ちなどについてご紹介しています。

real.local名古屋



アーティストにインタビュー

黄色いベンチの作者でもある松本崇宏さんにズバリ木彫りや題材について伺いました！地元からの声もあり街路樹の活用方法について協議し、実験的にではありますが公共空間を扱うプロジェクトが始まったのです。



ドローンから見る江川線

街路樹再生ワークショップに登場したドローンが海までまっすぐと港まちの景色を見せてくれます。街路樹の伐採が進むと地上でも先まで見通すことができそうです。風景はどのように変わっていくのでしょうか。



みなと土曜市が始まってどうですか？

街の人に話を聞きました

小さなマーケットイベントからスタートしたみなと土曜日も、徐々に地域に認知されてきています。続けていくなかで、変化を楽しみ、それぞれの方法で関わってくださる街の人の声をご紹介します。



※1：港まちづくり協議会のアート事業、[MAT, Nagoya]のプログラムで、アーティスト山下拓也さんの版画によるポスター作品を丸三本店に貼らせていただいた。

みなと土曜市：日時 | 毎月第2土曜日10:00～14:00（小雨決行）／会場 | 港まちポットラックビル、築地口商店街界隈、江川線沿い歩道エリア／料金 | 無料（予約不要）／運営 | セン（代表：岡西康太）／主催 | 港まちづくり協議会



撮影 | 三浦知也

みなと土曜市とは？

毎月第2土曜日に屋外で開催している「みなと土曜市」は、人々の交流の場となることを目標にしてきました。現在は「まちで楽しむ、まちを楽しむ、さまざまなチャレンジが生まれるマーケット」をキーコンセプトに掲げ、マーケットイベントの他に3つの企画が並走している点が特徴です。クラシック音楽のミニコンサート、マーケットへの新規出店のサポート、港まちの空き家の大家さん探し、とバリエーション豊かな3つの企画は、港まちで、港まちを楽しむ人が増えていくためのきっかけとしてそれぞれが役割を担っています。

VOICE 若い人たちに合わせたものを作りたいねって

公設でお店をはじめて、向かいに本店を構えて70年以上。お義父さんとこの本店で一緒に働いてきました。昔は人も店もずっと多かったから今はちょっと寂しいかなと思うけど、みなと土曜市の日は若い人が歩くようになりましたよね。その人たちが喜んでくれるような限定商品として、この辺りにはお店がないパンと、うちは肉ならたくさんあるからハンバーガーいいんじゃない？って店長と話していたんです。皆さんがお店に貼ってくれたハンバーガーのポスター（※1）が可愛いねということで、ハンバーガーにポスターの写真を貼ったりしてね。私たちも刺激をもらってるんですよ。人ってずっと同じだといふアイデアも浮かばなくなっちゃうし、飽きちゃうでしょ。ちょっとでも喜んでもらって、活性化していくといいですね。

佐藤めぐみ

さとう・めぐみ

ー
精肉店「丸三本店」3代目オーナーの奥さん。
お店に行くといつも笑顔で迎えてくれる。



VOICE ずっと住む街のことを考えるきっかけに

昨年、港まちづくり協議会が開催する次年度の事業を考えるワークショップに公募で参加したことをきっかけに、ずっと住んでいるこの街について考えるようになりました。まずは行動してみよう！と、「みなと土曜市」にボランティアとして参加しています。ボランティアを始めてからは家族も土曜市に遊びに来たり、地域の他のイベントにも参加するようになりました。街の方からも声をかけていただく機会が増え、買い物や家族と遊びに出かける時は街のお店に行くようになりました。土曜市が生まれたことで、クラシックの演奏を楽しんだり、お花やパンを買うという、月に一度のスペシャルを味わえることはもちろん、自分にとっては街との繋がりを持つきっかけになりました。今は住んでいるというよりは暮らしているという感じがですね。

足立博貴

あだち・ひろき

ー
港まち在住。春からまちの消防団に入団。
みなと土曜市のボランティアに参加。



VOICE ゆくゆくはお店を持ちたいと考えているので

パティシエの主人と一緒に焼き菓子をメインに様々なマーケットイベントに出店しています。イベントへ出店するようになったきっかけは「うちごはndeマルシェ」という、近所の古民家カフェで始めた小さなマルシェでした。ケーキセットを出してもらえないかと友人に頼まれたのを皮切りに、近所の方に美味しいと喜んでもらうことが増えていきました。そんな中、感染症でカフェがお休みに入ってしまったタイミングに地元で始まったのが「みなと土曜市」。そのときのお客さんにもまた会えたらいいなと思って出店すると、当時のお客さんはもちろん、新しいお客さんまで足を運んでくださるようになりました。ゆくゆくは自分たちのお店を持ちたいと考えているので、これからも様々なイベントで経験を積みたいと思っています。

岡田真希子

おかだ・まきこ

ー
港まち在住。みなと土曜市に洋菓子「griotte」として出店。
種類豊富な焼き菓子がおすすめ。



みなと土曜市の1日

運営を支えてくれるボランティアさんの存在無くしてみなと土曜市は語れません。

そんなボランティアさんが準備から片付けの間にどんな動きをしているのかを見てみましょう。

港まちの“新しい交流の場”を考えるきっかけになるかもしれません。



みなと土曜市メンバー座談会

コロナ禍の真っ只中に始まった「みなと土曜市」も2年目の秋を終えようとしています。
今回は運営リーダーの岡西康太さんの呼びかけで、MUSIC cruiseの北川明孝さんと林里紗さん、ボランティアの川越俊慧さんにお集まりいただき、土曜市のあれこれについて伺いました。

文：古橋敬一



数字で振り返る2021年度データ

JOINT COMMITTEE OF PORT TOWN ANNUAL REPORT 2021 DATA

開催事業数・テーマ別事業パートナー数

項目	開催事業数	テーマ別事業パートナー数
○ 暮らす LIVES	101	20
△ 集う MEETS	26	51
□ 創る CREATES	55	71
名古屋市要望事業	5	5

港まちづくり協議会の活動参加者数

○ + △ + □ = 延べ 29,436人

メディア掲載実績

2021年度のメディア掲載数は計32件でした。昨年度に比べると、新聞での掲載数が2倍以上に増え、テレビでも掲載された一方で、WEBでの掲載数が減少しました。テレビ視聴者の方々からのお声が増えたように、伝えたい情報や届けたい層に合わせてメディアを使い分けられることの効果を実感しました。取り組みをより多くの方に知っていただけるよう時代にあった方法を模索してまいります。

新聞	WEB	テレビ	ラジオ	雑誌・広報誌	合計
12	16	3	0	1	32

会計報告

2021年度の収入額は69,349,911円、支出額は67,896,642円で収支差額は1,853,353円となりました。支出内訳としては、「○心地よく安心な港まちで『暮らす』」が4,238,764円、「△魅力的でにぎやかな港まちに『集う』」が12,909,140円、「□みんなと港まちを『創る』」が23,607,035円（事務局運営費27,141,703円を含む）です。収支差額1,853,353円を名古屋市に返還しました。

項目	予算額	決算額
収入	69,349,911	69,749,995
支出	69,349,911	67,896,642
○ 暮らす LIVES	4,276,500	4,238,764
△ 集う MEETS	15,757,411	12,909,140
□ 創る CREATES	21,394,000	23,607,035
収支差額	0	1,853,353

(円)

港まちづくり協議会 2021年度報告書

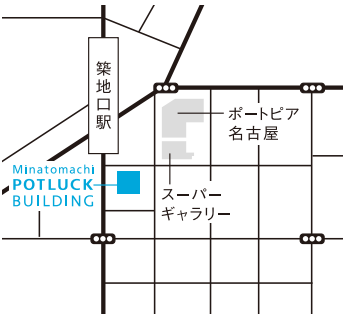
JOINT COMMITTEE OF PORT TOWN ANNUAL REPORT 2021

2021年度 港まちづくり協議会メンバー（令和3年6月21日現在）

会長	早川 勝利（西築地学区連絡協議会推せん）
副会長	高崎 勇一（築地口商店街振興組合推せん） 加藤 和彦（名古屋市港区役所区政部長）
委員	河田 正巳（西築地学区連絡協議会推せん） 安井 宗敬（西築地学区連絡協議会推せん） 松本 一男（西築地学区連絡協議会推せん） 大口 靖夫（西築地学区連絡協議会推せん） 斉藤 俊宏（名古屋市総務局総合調整部総合調整室長） 大谷 達哉（名古屋市スポーツ市民局地域振興部地域振興課長） 前川 滋美（名古屋市住宅都市局都市整備部名港開発振興課長） 中野 勝之（名古屋市緑政土木局港土木事務所長）
事務局長	木村 仁（名古屋市港区役所企画経理室長）
事務局次長	古橋 敬一
事務局員	児玉 美香 大西 未来 竹内 希 小田 ビニシウス

制作	港まちづくり協議会
編集	大西 未来、井上 恵理（港まちづくり協議会事務局）
表紙作品	松本 崇宏
編集アドバイザー	竹内 厚（Re:s）
写真	三浦 知也 倉田 果奈（港まちづくり協議会事務局）
デザイン	株式会社クーグート
印刷・製本	株式会社東海共同印刷
発行	港まちづくり協議会 〒455-0037 名古屋市港区名港1-19-23 Minatomachi POTLUCK BUILDING TEL 052-654-8911 FAX 052-654-8912 E-MAIL info@minnatomachi.jp WEB www.minnatomachi.jp 2022年12月発行

WEB編集	倉田 果奈、土屋 未久（港まちづくり協議会事務局）
WEBデザイン	プチグラフィックス



SPECIAL THANKS (P.8)
岡西 康太（セン代表）
北川 明孝（ON music project代表）
林 里紗（フルート奏者）
川越 俊慧（みなと土曜市ボランティア）

Cover story

松本崇宏 彫刻家

木を彫るという行為を初めて十数年、この作品を手がけるまではどこで育った木かなんてさほど気にもしてこなかった。港まちで育った木で作った作品を港まちに戻す。日常に接するウィンドウギャラリー。不思議と風景に馴染み、まちの人にも受け入れられ、作品の顔さえ少し違って見えた気がした。